

## 旅立ちの春に

半世紀前、高校を卒業した私は、京都に移り住みました。大徳寺近くの棟割長屋に住み、自転車で名所旧跡巡りの日々を送りました。美しい仏像や歴史の断片に触れる夢のような暮らしは1年で終わり、生活の舞台は広島へと移りました。

広島夏の夕暮は、瀬戸の夕風で灼熱地獄の様相を呈します。テレビも扇風機もない貧乏学生の私は、市民球場のスタンドで、酔っぱらいのおじさん達と万年最下位のカープの応援に興じたものです。そして、学生生活を終えようと、宍道湖の落日に誘われるように故郷に帰ってきました。時は流れて50歳の頃、東京勤務となりました。お洒落な街、中目黒に住み満員電車で通勤です。日本中がデフシで喘ぐ中、驚くことに何十棟もの高層ビルの建築が進んでいました。

古都の魅力満載の京都、

荒々しい活力がみなぎる広島、独り勝ちを謳歌するメガロポリス東京。それぞれの魅力を満喫しながらも、これらの街で一生暮らす気にはなれませんでした。

私の松江への愛着は、どうやら少年時代の体験がベースになっているようです。楽山公園での秘密基地づくりと戦闘ごっこ。夏休みの昆虫採集や秋の椎の実拾い。朝酌川での魚とりや筏遊び。ちょっと足を延ばして宍道湖のゴズ釣り、古浦や北浦の海水浴、それに嵩山や枕木山登山。

この春も多くの子供たちが松江から旅立っていきます。時代が違うとはいえ、私たちはその子たちに、松江ならではの体験をどのくらい提供してきたのでしょうか？ 顧みて  
 忸怩たるものがあるのです。

•  
•  
•